

平石 手短に言ったほうが良いと思います。内藤さんがかなりお答えになったところもあるんですが、内藤さんの議論で僕にとって一番広いところでずっとひっかかっている、ひっかかっているというか自分にとっても答えが出ないというのは「自然主義の誤謬」のところですね。内井惣七先生は非常に圧力のある人で、実際に目の前に行って話をすると圧倒されてしまうという圧倒的な知性の持ち主なので、本を読むと納得できない感じがして話を聞きにいくと、ああそうかと納得しちゃうんですけど、本当にそれでいいのかみたいな感じがある。

この間、僕の後輩で哲学崩れのやつがいるんですが、そいつと内藤さんと一緒に話をしたんですけども、そのときに話をしたのは、内井惣七の議論ですね。免許を持っていないけれども、違反せずに運転したいと思っている人には免許を取るべきだというアドバイスをできるというのは、それはそこで、「人は合理的に振る舞うべきだ」という前提がおかれているわけですね。それはどこから出てきたのかというと、それはどこからも出てきていないと思うんですね。そこが前提になってしまっているのではやはりおかしい。それはリープがあるのではないかと。合理的に振る舞うべきだということを一体どこにグラウンドさせるかということ、どこにも多分グラウンドできないだろうということはあると思います。

僕は「利他行動」とかの研究をしているんですが、何でそんなことをやったのかというと、本来利己的であるはずの人間というものから、どうして利他的な行動が出てくるのかというのは解かねばならない。そこを解けないと、それこそ環境問題なんて解決できない。自分が好きな車に自由に乗ることができないということがあったのですが、いくら追っついていっても、価値命題にはつながらない。いろいろ考えると、かなりペシミスティックといえばペシミスティックで、基本的に言えることは、事実命題までであって、その上でどうするかというのは多数決で決めるしかないのではないかと。もしくは偉い人に決めてもらうしかないのではないかと。要するに政治の問題じゃないかというふうに僕は思っています。

その政治の結果、多数決をとったグループのほうが、独裁者が全部の権利をとっていったグループよりもうまくいくということがあるのであれば、みんなが多数決をとりましょうというふうにいるいろいろな国の政治形態が変わっていくでしょう。それだけの話であって、そっちのほうが良いとか悪いとかという価値の話では結局ないのではないかと。本人たちとしてはそっちが良いと言っているけれども、それは自分にとって得になるからそっちを選ぶということを言っているだけであって、それが普遍の価値としてあるのかと言われると別がないのではないかと。なくても人権に基づいた政治形態は成立し得るし、それが選ばれて広まっていくということは十分あるのではないかと。価値なんてものはないかと。実際に世界は成り立つのではないかと。非常に乱暴なことを言うとそうである。

実際チンパンジーとかヒヒの話が出ましたが、チンパンジーの世界には価値はないと思うのですが、しかし彼らはそれぞれグループの中でケンカをすれば、藤本さんが紹介されていましたが、仲直り行動をして、グループの中の α 、 β 、 γ がいて、つまり強いオス、もしくは強いメスがオス同士のケンカに仲裁に入ってグループの安定を保つというような

ことをしているわけです。そうすることがよいからとか、そういう価値観を彼らが持ってやっているわけではきっとないと思うんですね。そんなものは別になくてもいい。しかし事実の問題として集団が安定したほうが自分の gene を次世代に伝えていく上で有利であるというところで成り立っているのではないかという、かなりドライな見方を最近の僕はしています。

内藤さんと違うところだけを挙げていきたいと思います。その上で、古茂田先生の発表について、北半球と南半球という話が出ましたけれども、あれは僕はむしろ、こう言うと失礼ですけども、よく陥りがちな勘違いだなと。北半球の人が、南半球の人が全部死んでくれればそれによって人類の gene が残っていくからいいじゃないかという判断をもししたらというふうにおっしゃいましたけれども、それはまさに自然淘汰の主体をグループに置いている考え方で、集団淘汰の考え方です。ヒトという種の遺伝子が残っていくことが重要であると。

そうではないんですね。各個人の gene が残っていくことしか、各個人は考えない。ヒトが残っていくかどうかなんてことは考えない。考えているはずがないじゃないか。集団淘汰のロジックで考えると、そういうことを考えているやつは、むしろ数がふえ過ぎて困っているから南半球が全部死ななきゃいけないという話になったら、我先におれはみんなのために死ぬよと言って死んでしまう。そういう人は遺伝子を残さないで、残っている遺伝子というのはそのときに死なない遺伝子だということになりますから、みんなのためにみたいな遺伝子はなかなか進化し得ない。そういうことはなかなか起きてきませんよということが原則なわけです。それが selfish gene ということです。では論理的に selfish gene でいくはずなのに、何でみんなこんなにちゃんと協力するのか。なぜ人権なんてものがあるんだということを生物学者は悪戦苦闘して理論を立てているわけですから、そのところは誤解であると思います。

さらに内藤さんの議論で言えば、さっき対抗する集団がないとおっしゃいましたけれども、そうではなくて、ここでは北半球と南半球が対抗するわけです。北半球のほうは南半球がみんな死んでくれれば人類が救われるよと仮に言ってきたとしますね。実際に言っていることは北半球に住んでいる個々人が自分が生き延びて子供を残すことができますよと。南半球だって別に無言でいるわけではないですから、南半球のほうも自分の子供を残すために頑張る。そのときに、北半球はしかし、みんなが生き残れますよという戦略をしたとして、南半球はおれたちが勝ったらおれたちのうちのトップの 10 人だけが生き残れますよという戦略をとったときに、北と南、どっちが勝ちますか。もちろん北と南は人口差がありますけど、そこを全部同じにならしたとしたときに「どっちが勝ちますか」という話で、内藤さんの議論というのは、そういうときに恐らくグループの中で平等に分配が行われるほうが強いということがあって、それが広まってきているのではないかという議論なわけですね。

ただ繰り返しになりますけど、だからそれがいいんだという話にする必要はないのでは

ないか。場合によってはトップの 10 人が生き残るとやったほうが、トップの 10 人のリーダーシップがものすごく強くて、しかもグループのみんなをうまく洗脳して、うまくそういうことを全部隠して、話にのせて戦争に勝っちゃったということがあるかもしれない。そういうフェーズを人の歴史とか、ほかの動物の歴史でもあるかもしれないわけですね。そういうものじゃないかと思います。

どっちが価値観として優れているかと思うのは、それぞれの人の勝手だけれども、どっちが出てくるのかというのはそのときのいろいろな状況によって変わってくるということかなと僕は思っています。いまいち話がまとまっていないですが。

もう一つ、発展史観なのかという話があって、どうなんでしょう、僕はどちらかというどと発展史観というよりは、個人的な話であって、内藤さんの本がという話ではありませんが、どちらかというどと循環史観という感じで考えています。進化理論で利他性とか協力行動を扱うときにはゲーム理論というものが出てきますが、これを発展史観で考えていくと、要するに一つの安定した均衡状態に落ち着くということですね。ゲームをやっていくとみんなが同じ戦略をとるとか、もしくは、ある戦略が 3 対 4 対 2 の割合でいるという状態に固定して、そこからは一步も動けませんよと。

よくボウルの中に玉を入れる、要するに野菜ボウルみたいところに玉を入れると底に落ちますね。そこからいくら行動を変える個体がいっても、必ずそこに戻ってきますよという説明をするんですけども、そういうのはどちらかというどと発展史観っぽいんですけども、実際にゲームのシミュレーションを走らせると、ゲームが複雑になればなるほど、ボウルの底というのが幾つもあるような状態になって、三つぐらいの安定点があるようなことになったりする。そこで一つの安定点に落ち着くことがあっても、基本的に自然淘汰というのはエラーが生じることを前提にしているわけです。ですから、何かノイズが入ると途端にグルグルグルと全然違うところに行って、また違う安定状態に行く。そこでまたエラーが入って、また全然違うところに行くというようにグルグルグル回るというイメージがあります。

例えば中国で易姓革命なんて言いますがけれども、ああいうのに似た世界だなと思って見ているんですけども、どちらかというどとそういうイメージがあります。いろいろな均衡状態を変わっていく。そのうちの均衡の一つが人権というものをベースにした集団の中でかなり平等にいろいろなものが配分されるという状態なのかもしれないということですね。

あとは北半球・南半球という古茂田先生の (1) のところで、selfish gene のところから個人に定位した人権論にはつながらないのではないかということについて言おうと思っていたのですが、メモをしていなくて忘れてしまったので、後でまた機会があれば (お話しします)。

あと伊藤さんのコメントについては、同性愛者の権利云々というあたりは、内藤さんがおっしゃったとおりです。もっとトリビアな情報をつけ加えておくと、同性愛って、特に男性のホモセクシュアルについての研究は結構進んでいて、結構遺伝するんです。すごい

謎なんです。なぜかというと同性的愛者は子供を残さないのに、どうしてその遺伝子が世の中に残っているんだという疑問があるわけです。

これについてはいろいろな仮説があるんですけども、これは確立した話ではないのでほかのところに行って自慢げに話さないでほしいのですが。(笑) 言われているのは、先ほど血縁者がいるという話をしましたが、同性的愛の遺伝子というのは自分自身の子供は残さないけれども、おいごとかめいごの面倒をよく見る。それによっておいごとかめいごとかは確率としては 25%の割合で自分と同じ遺伝子を持っているわけですから、その中に遺伝子が残っていればそっちで伝わっていくことはできるわけです。

そういうことで、実際に研究が行われていて、同性的愛者がいる母系の家族は、いない家族よりも孫の数が多い。ほんとなんだらうかといった、そういう研究も実際にあることはあります。そうすれば、彼らも「繁殖」というところから完全に離れた存在ではないということはあると思います。原則として内藤さんのおっしゃったとおりでいいと思います。

あと「言語」と「思考」のところで言わせていただくと、内藤さんがおっしゃっていましたが、人間の合理性というのが、言語コミュニケーションそのものが人間の合理性を生むと言うけれども、そのときの合理性というのは一体何のことなんですかということです。例えば規範論理学にのっとりた行動をしているかということ、別にそんな行動を我々はしているわけではなくて、実際皆さん、アリストテレスの三段論法を今から全部やれと言われてたら、全部解ける人は多分いないはずですよ。人間は合理的で言語を持っているがゆえにきちんとなっているのであれば、数千年前に全部アリストテレスが全部やってくれているんだから、そのとおりに思考できていいはずなのにそれができない。そのことをどうするんですかという話は一つあります。

あとは合理性というのとはちょっと違いますけれども、例えば人間の知性というものを考えるときに、心理学者は知能テストをずっと長いこといろいろ開発してきていますが、知能テストというのは大きく分けると二つを測（はか）る。一つが言語性 I Q、もう一つは空間性 I Q といってパズルを解いてもらったりということをやります。そっちのほうは思考とは呼ばないんですか。それは言語によらないものは思考とは呼ばないんですかという話があります。

それから先ほどヒヒの話もありましたけれども、言語を持たない赤ちゃんは思考しないのかということ、例えば赤ちゃんに 3 掛ける 9 を解けといてもできないですよ。でも 6 カ月児ぐらいでも 1 足す 1 は 2 だということぐらいわかっている。もちろん 1 足す 1 はと聞いて書かせるわけではないですから、そこは巧妙な実験を含みますが、それをもって伊藤さんがそれを「思考」だと認めるかどうかという話はあると思いますが、そういう研究はあります。

具体的にどういうことをやるかということ、赤ちゃんの目の前にまず最初 1 個ミッキーマウスを置いて、スクリーンをミッキーの手前に落とす。そこにもう 1 個ミッキーを上から落とす。そこでスクリーンをパタンと倒すとミッキーが一つしかいないと赤ちゃんはびっ

くりするわけです。つまり二つあるはずでしょう。1足す1は2でしょうということがわかっていて、そんなのを思考とは言わないと言われればそうかもしれないけれども、でも足し算でしょうと言われれば足し算なわけですね。そういうことが研究としてはあります。

ほかにもいろいろあります。思いついたのは、例えばスプリットブレインという話がありまして、人間の脳には左右の半球がありますけれども、その間を脳梁というものがつないでいますが、これをてんかん発作を抑えるために人工的に切るという手術が昔行われていて、そうすると左右の脳の（情報の）行き来がなくなるわけです。そういう人に目の前につい立てを立てて、左の視野と右の視野に違う映像を見せるという実験があります。

例えば右の視野に鉛筆を見せながら左の視野に——心理学の実験室で大まじめな実験をしているときに、いきなり女性のヌードの写真を見せると、見ているスプリットブレインの患者さんがクスクス笑う。どうして笑ったんですかと聞くと、その人は、「だって先生そんな色のペンはないですよ」みたいなことを言うんです。自分がヌードの写真を見たということにはちっとも気がついていない。どうしてかという、言語野というのは基本的に左半球にあって、右視野の情報が左半球に行くんですね。左視野の情報は右半球に行くので、ヌードの女性の情報というのは言語野には来ないわけです。そうすると意識はされないわけです。

要するに何をもって意識と言うか。言語的な意識はされないわけですが反応としてはクスクスと笑っている。そのときに「そんな変な色のペンはないですよ」という反応のほう言語により合理的な判断というのか、それとも言語にはよっていないけれども、クスクス笑ったというほうはそのシチュエーションから考えて、いきなり変な刺激が出たことによる反応して合理的だったのかという疑問が出てくるわけです。そのあたりをとっても合理性というのは一体何なのかというのは、いろいろと突っ込みどころはあります。心理学者はそういうことばかりやっている（笑）。

あと言語と感覚の関係でいうと、これを言われると心理学者としてはこういうことを返さざるを得ないんですね。そもそも日本人はほんとに肩が凝っているんですかと。肩が凝っているという感覚はほんとに皆さん同じものなんですか。そんなことだれにもわからないんですよ。むしろそれを言ったら、この紙コップは白く見えていますけれども、僕の持っている白という感覚は皆さんの持っている白と全く同じだという保証はどこにもないわけですね。

そこら辺は、肩のここら辺で何かこういう何かネガティブな感情を、日本ではみんな肩が凝るという表現で共有しましょうと。それは同じことにしましょうというのが文化というものであって、それと実際にその感覚を持っているかどうかというのは多分違うことじゃないかなと僕は思います。それがある程度共有できるというときに、同じラベリングをみんなが張ることができるということだろうということです。

あと言語の自律性ということについては、内藤さんがおっしゃったとおりですけれども、

そのことであえてつなげると、これは meme の話につながるわけです。要するにめちゃくちゃなことを考えることもできるというのが確かに言語で、言語学者の有名な例というのは「緑色の透明な概念が猛烈に眠る」というセンテンスがありますが、そんなことも考えられるわけですが、あまりに意味がない発言とか思考というものは、個々人の中では生じてくることはあるでしょう。個々人が発することもありますが、それが社会の中に広まるかというのと広まらないわけでは、広まらなければそれは影響力を持たないわけです。

では、そのところで広まるか広まらないかというときの判断として何がきいているかという、それは人のそれぞれの Mind というものがあって、その Mind は何によってできたかという、それはもちろん Natural Selection (自然淘汰) が大きく働いているでしょうということと言えるだろう。

ある程度、文化というものがイナーシャ (inertia) を持って人の行動に影響を持つという事は十分あると思います。一度成立してしまった制度とか社会のシステムというものが引き続き影響力を持つ。例えば今の日本の社会の中ではまさにそうですね。グローバルスタンダードみたいなことが言われているけれども、それに対してみんながすぐに対応していくことができないという意味でのイナーシャ。そして必ずしも年功序列的なのが今もう適応的ではないかもしれないけれども、まだみんなそこから抜け出せないということがあって、そういうことはあるとは思いますが、全部がリニアに適応的な適応的なというふうに行動ができるほど人間もよくできていないと思いますけれども、そんなにむやみやたら、めちゃくちゃなことが成立するようなものでもないだろうと僕は思います。そんなところでは。